

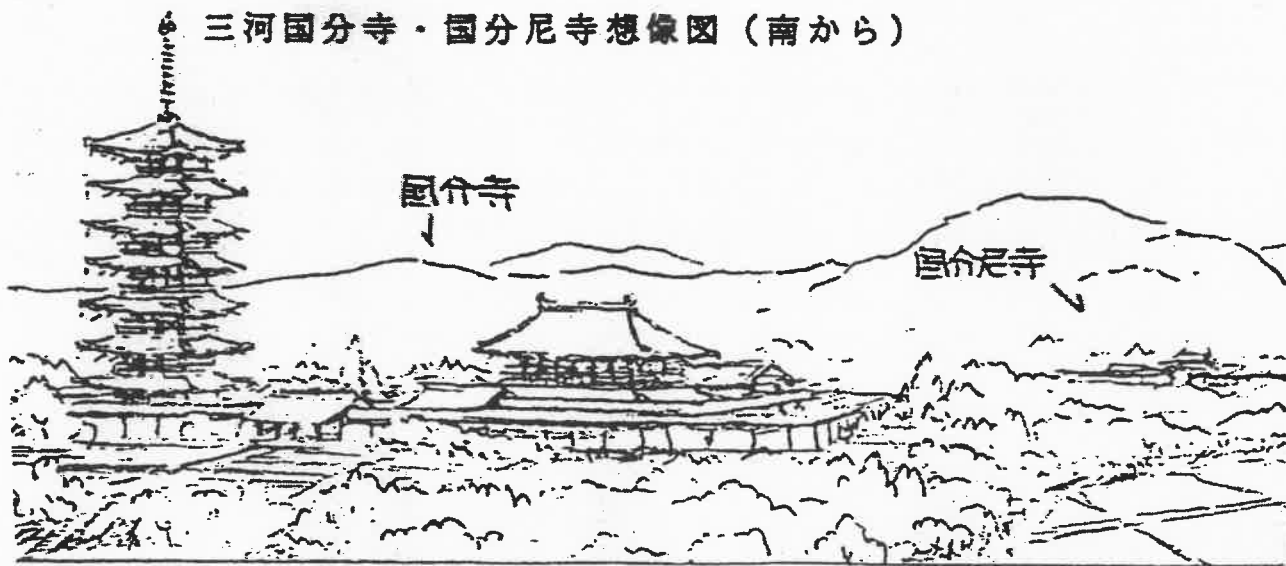
三河国分寺跡の発掘調査始まる

7月21日から、ほぼ1か月の予定で三河国分寺跡（豊川市八幡町本郷）の発掘調査が始まります。昨年秋の発掘と同じく、今年も伽藍（がらん寺の建物）の配置、寺域（いせ 寺の範囲）を確認するために調査を行います。さて、今年にはどんな発見があるのでしょうか.....

1. 国分寺とは

国分寺とは、奈良時代に聖武天皇の勅願により国ごとに設置された国立寺院であり、^{しやうぶ} 僧寺と^{ちやくがん} 尼寺の二寺制をとっていました。天平13年（西暦741年）に国分寺造営の詔（天皇の言葉・文章）が出され、正式の名称は、僧寺が「^{こんこうみょうしてんのう} 金光明四天王護国之寺」、尼寺が「^{ほっけ むつどの てら} 法華滅罪之寺」と定められています。このように、全国の60余ヶ国に建てられた国分寺国分尼寺は、「^{くに はな} 国の華」とうたわれ、新しい仏教文化の中央から地方への窓口となっていたわけです。なお、これらの国分寺の総国分寺が、大仏で有名なあの奈良の東大寺で、総国分尼寺が^{ほっけじ} 法華寺です。

三河国分寺・国分尼寺想像図（南から）

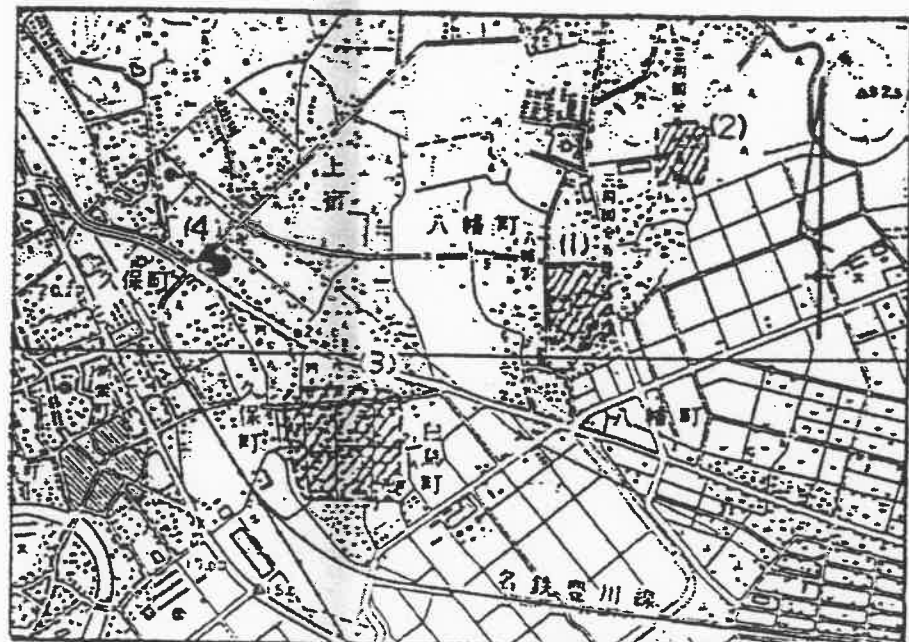


2. 三河国分寺

国分寺の存在する八幡台地は、古くより栄え、国分寺の西約1 kmの地には、三河最大級の規模を有する船山古墳（5世紀・前方後円墳・全長96 m）があります。やがて、大化の改新を迎えると、当時の三河国（今の西三河）と^{まのくに}魏国（今の東三河）が合併し、三河国が誕生しますが、西三河の国名を残して三河国とするかわりに東三河の地に三河国の^{こくが}国衙（今の県庁のようなもの）が置かれました。このように、八幡台地は、古代には三河国の中心として栄えた地域で、地形的にも条件のよいことから、この地に国分寺・国分尼寺が建てられました。

ところで、三河国分尼寺は、既に昭和42年に発掘調査が行われて^{がらん}伽藍配置など、ほぼ確認されていますが、国分寺については、まだ調査を始めたばかりで、推定される塔跡と、^{かいろう ついじ}昨年の調査で回廊と築地の一部が確認されているのみです。

- (1) 国分寺
- (2) 国分尼寺
- (3) 国衙推定地
- (4) 船山古墳



1
25,000

0 1 km

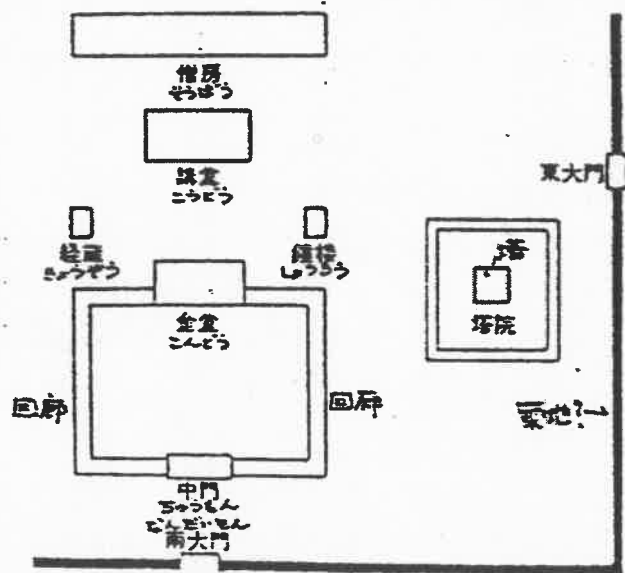
3. 昨年度の発掘調査の成果

昨年の秋の発掘では9ヶ所（A～H）にトレンチを設定し調査を行いました。その中のFトレンチ及びHトレンチから回廊跡と予想される遺構が発見されました。〔回廊とは、建物と建物をつなぐ屋根つきの廊下で、普通は中門から金堂もしくは講堂につながっています。（下図参照）〕そして根石（礎石をしっかりと据えるために下におく石の集まり）の配列から、この回廊は三河国分尼寺と同じく複廊（まん中の壁の左右を歩ける）であることが確認されました。

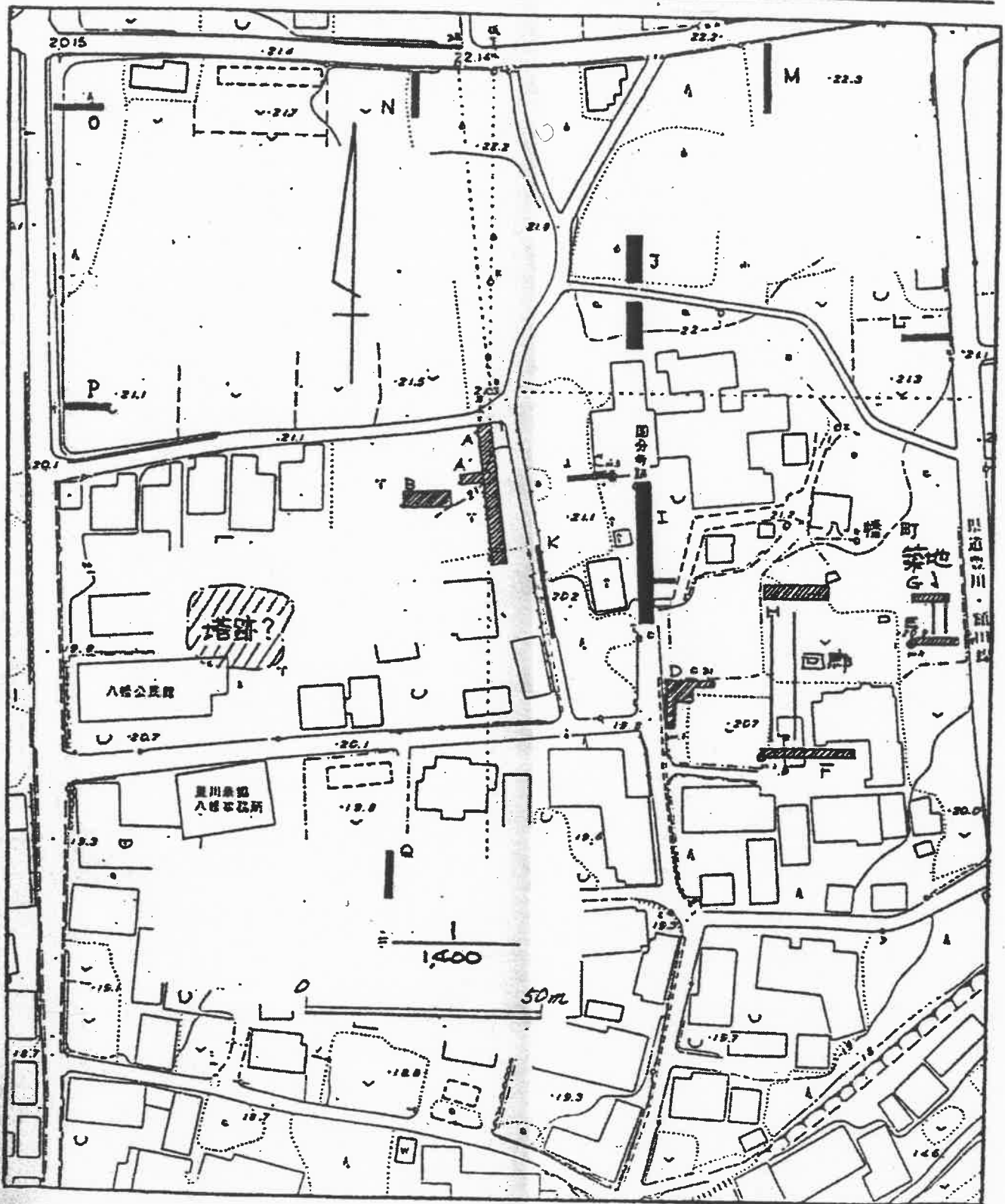
また、Hトレンチ、Gトレンチからは、築地跡（寺を囲む塀・瓦葺きである。）が発見されました。ほぼこの位置が国分寺の東の境となり、県道に沿う形で南北に築地が延びると考えられます。このほか、Aトレンチからは、捨てられた瓦が多量に発見されています。

さて、今年度は、I～Qの9か所にトレンチを設定したわけですが、現国分寺本堂前や裏のI、Jトレンチあたりで、どんな建物の跡が出るのでしょうか。

※ 陸奥国分寺では金堂跡の東に塔跡が存在するが、三河国分寺では金堂の西側に塔がくる可能性が強い。



伽藍配置の例（陸奥国分寺・仙台市） 1 / 2, 500



今年度発掘トレンチ (I~Q)
 昨年度発掘トレンチ (A~H)

三河国分寺跡発掘トレンチ位置図

4. 三河国分寺跡出土遺物

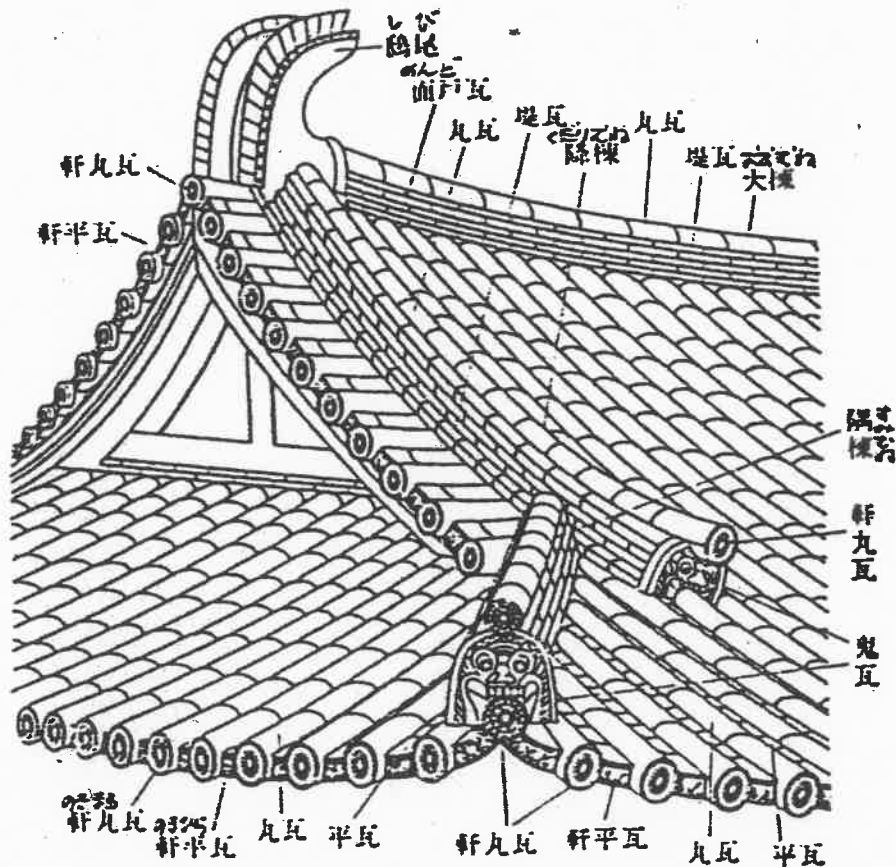
昨年こととしの発掘調査では、A、A'トレンチを中心として、多量の瓦が出土しました。

当時、国分寺の建造物はほとんどが瓦葺きで、太い柱と大きな礎石によって、その重量を支えていました。瓦の大きさ、軒丸瓦が直径18cm前後、軒平瓦が27cm×35cm程の大きさに、現代の瓦よりかなり大きく重量もあります。これだけの瓦の重量に耐える建造物を建てるには高度な建築技術を必要とし、おそらく奈良の都から技術者が派遣されたと思われる。

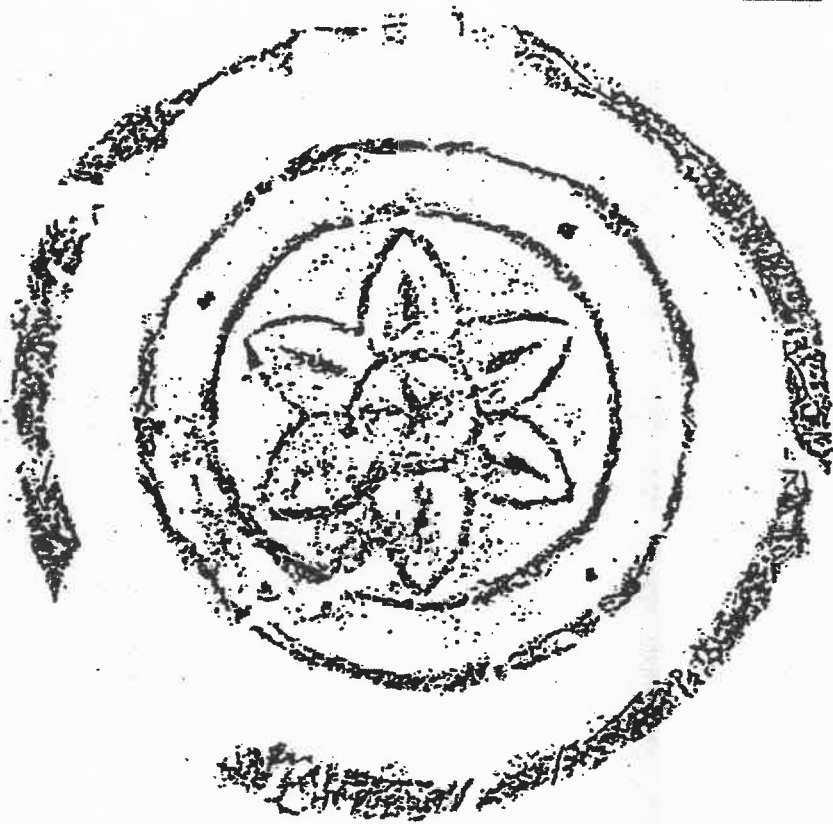
なお、この三河国分寺の瓦は、赤塚山古窯址及び平尾町の天間古窯址などで焼かれたと考えられています。

屋根・瓦の名称

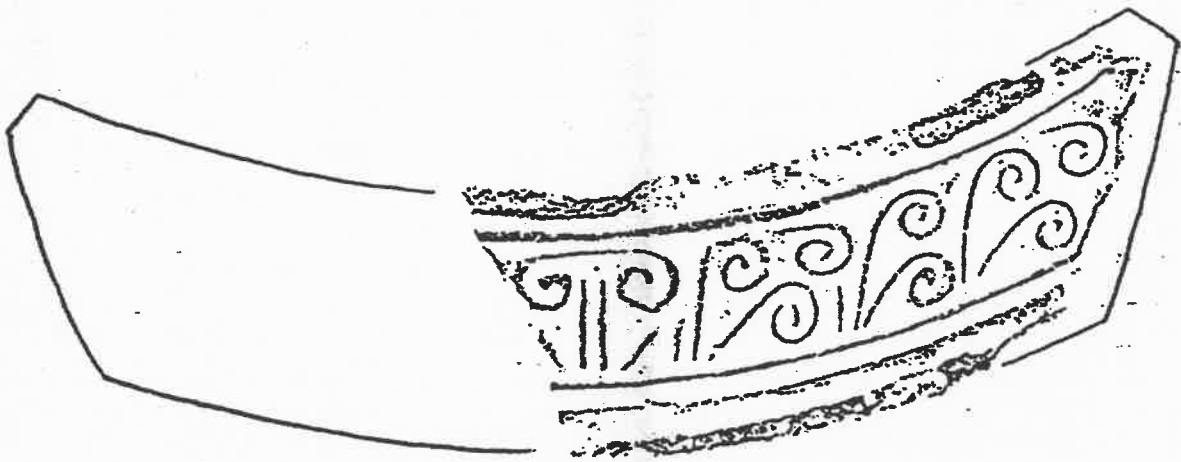
※ 軒丸瓦はあまがし鑑瓦、軒丸瓦はのり字瓦とも言う。



== 軒丸瓦 ==



== 軒平瓦 ==



——三河國分寺の軒丸・軒平瓦の文様——

$$S = \frac{1}{2}$$